

一八八五年九月二十日(日)

病気の聖ラーマクリシユナとラカール医師——信者たちと踊る

聖ラーマクリシユナは南神寺ドゥネキシヨルの自室で信者たちにとりまかれて坐っておられる。一八八五年九月二十日、日曜日。アツシン月五日、白分十一日目。ナヴァゴパール、ヒンドゥー・スクールの教師ハララル、ラカール、ラトウたち、キールタンを歌うゴースワミーなど、大勢が来ている。ボウバザールのラカール医師といっしょに校長はやってきた。医者ミにタクルの病気を診てもらったためである。

医者はタクルの病状の変化を診みている。この人は中肉中背で、手指だけは太くまるまるしている。聖ラーマクリシユナ「(医者に向かつて)——あなたの指は相撲取りの指のようだね、アハハハ……。マヘンドラ・サルカルが診てくれたが、あんまり舌をつよく押したもんで、あとでひどく痛かった。まるで牛の舌でも調べるように引っぱったり押ししたり——」

ラカール医師「そうでしたか。私はあなた様に痛い思いはさせませんよ」

医者が処方箋を書いたあと、聖ラーマクリシユナは再び皆とお話しになった。

〔聖ラーマクリシユナは何故病気になったか？〕

聖ラーマクリシユナ「(信者たちに)——アツチャ、人がね、こう言うんだ。あなたはこれほどのサードウなのに、それでも病気にかかるとはどういうわけか、とね」

ターラク「バガヴァン・ダース・ババジも病気で長い間ふせつておられましたよ」

聖ラーマクリシユナ「マドゥ医師はね、六十才にもなるのに、めかけ妾の家に食事を運んでいるんだよ。なのに病気ひとつしない」

ゴースワミー「あなた様が病気におなりになるのは、他の人々のためでございます。ここに来る人たちが、それぞれ罪科つみとがを背負ってくるものですから、それをすっかりご自分で引きうけて病気になられたのですよ！」

一人の信者「大実母ママに、この病気を治しておくれいってお願いなされば、たちどころに治つておしまいでしょに——」

〔神と召使いの気持ちが減ったこと——私わをさがしてもないこと〕

聖ラーマクリシユナ「病気を治しておくれいなんて、マーに言えないよ。それにこの頃は、神が主人で自分は召使めかけいいという気持ちだが、だんだん薄れてきた。以前には、「マー、この刀鞘さやをちよつと修繕して下さい」とお願いしたのだが、こういう祈りはほとんどしなくなった。今日この頃は、ワタシわというものをいくら探しても見当たらない。この鞘さやのなかにいなさるのは、ほかならぬあの御

方だとハッキリわかるんだよ」

キールタンをするためにゴースワミーは呼ばれたのである。一人の信者が、「キールタンをするのですか?」と聞いた。聖ラーマクリシュナが病氣なので、キールタンをするのと興奮なさるのがよくないのではないかと、信者一同は氣づかっている。

聖ラーマクリシュナはおっしゃる——「ちよつとならないよ。わたしが恍惚状態になるから心配なんだろう? あの状態は喉のどの病氣の場所にさわるから——」

キールタンを聞いていらつしやるうちに、タクールは恍惚境に入るのを防ぐことができなくなれた。立ち上がって信者たちと踊りはじめられた。

ラカール医師はその一部始終を眺めていた。彼の乗ってきた賃馬車が待っている。医者と校長はカルクッタに戻るため立ち上がった。二人は聖ラーマクリシュナにごあいさつした。

聖ラーマクリシュナ「(やさしく校長に向かつて)——お前、何か食べたかい?」